

ひかりねぎブランド産地の維持発展

～周年栽培による規模拡大を目指す～

1 課題の目的

JA ちばみどりそうさ園芸部管内の長ねぎは高品質な「ひかりねぎ」として全国有数のブランドである。平成 29 年度現在、生産者数は 222 戸（うち海匠管内 77 戸）、販売金額 15.06 億円、出荷量 3,969 t である。

当産地においても生産者の高齢化や離農による面積の縮小が進みつつある。市場でのブランド価値を維持するにはロットの確保が必須である。出荷量 4,000t を安定的に維持するため、以下の取組を実施した。

2 課題の背景

（1）新規担い手の育成と後継者の規模拡大

JA 広報誌を通してねぎ新規栽培者向け講習会の受講者を募集している。

平成 30 年度は 35 名（うち海匠管内 19 名）の受講希望者がいる。

また、後継者世代の研究会組織として「ひかりねぎ研究会」があり、平成 30 年度は 29 名（うち海匠管内 16 名）が在籍し、研修会等を積極的に開催している。

（2）難防除土壌病害の対策検討

重要な土壌病害として、ねぎ黒腐菌核病と萎凋病がある。黒腐菌核病については、管内では地域限定的な発生に留まっているが、徐々に拡大傾向にあり対策が求められている。萎凋病は連作障害の大きな要因と推定され、管内で広く発生している。

（3）周年栽培でのねぎ安定生産技術の検討

担い手が規模拡大するには雇用の導入が必要である。雇用を維持するためには、通年出荷による毎月の収入の確保が重要であり、周年栽培の要望がある。そのため、現在は台風の影響等の理由で出荷量が少ない 8～10 月どり作型の検討を行う。

3 普及活動の経過

（1）新規担い手の育成と後継者の規模拡大

新規栽培者向け講習会を年間 5 回実施し、毎回 20～25 名の出席があった。

また、JA 担当者と山武農業事務所と連携し、受講者の個別巡回を定期的に行って栽培技術の定着を図った。

ひかりねぎ研究会では、周年栽培の一環として、10 月下旬から 11 月上旬の年内早どり作型の実証圃を 2 か所設置し、月に 1 回現地検討会を実施した。また、規模拡大に向けた省力化機械の検討として、全自動播種機及び定植機の実演会を実施した。

（2）難防除土壌病害の対策検討

ねぎ黒腐菌核病対策については、前年度までの試験結果（土寄せ時のモンガリット粒剤の使用、及び石灰資材等による pH 調整）について、講習会や個別巡回時に周知を図った。また、連作障害対策をテーマとし、管内 19 圃場の詳細な土壌分析（一般分析＋微量要素＋生物性）を行った。連作していても収量品質の良い圃場、悪い圃場、

新規の圃場のデータを比較した。生物性分析の項目として、萎凋病菌数も計測した。

(3) 周年栽培でのねぎ安定生産技術の検討

8～10月どりに適した品種として、タキイ種苗のTNE-765（平成30年度に「名月一文字」と名称がついた）を6戸で試験導入した。

また、台風対策として防鳥ネットを使用する方法を2戸で、風よけソルゴーを栽培する方法を2戸で試験した。

4 普及(調査)活動で得られた成果

(1) 新規栽培者の増加等による面積拡大

平成30年度は6戸が新規にひかりねぎとして出荷を始めた。また、ひかりねぎ研究会員では3戸が規模拡大し、新規栽培者と併せた拡大面積は計280aとなった。ひかりねぎ研究会員の中で、省力機械として収穫機2台、播種機1台、定植機1台が新たに導入された。

(2) 難防除土壌病害の対策の実践

黒腐菌核病の体系防除を新たに3戸が導入した。土壌分析については関係市町村の協力も得て、予算の確保により、3か年事業で行うことになった。今年度の分析結果で相関性の高かったpHの矯正について、堆肥施用を4戸が実施した。

(3) 新品種導入等による収穫期の拡大

「名月一文字」は導入した全ての生産者で高評価であり、7月31日から出荷が可能で、11月上旬頃まで収穫できた。次年度は13名が導入する予定である。

台風対策について、防鳥ネットは強風により飛ばされ効果が出なかったが、風よけソルゴーは、定期的に剪葉することで丈夫になり、一定の効果を得ることができた。



防鳥ネット展開の様子



風よけソルゴー栽培

5 問題点と今後の展開方向

限られた管内生産圃場で出荷量を維持するため、周年栽培及び連作障害対策について継続して取り組む。また、面積拡大や雇用導入を見込み、出荷規格の緩やかな加工業務用向け出荷の要望が若手生産者を中心に高いため、対応を検討していく。

(匠瑤グループ 普及指導員 岡崎 遼人)